

お芋も私もホッカホ力

(2019.1.07)



今年（今では去年）もやりました。私の顔を見る度に「焼き芋やらないの？」と要求していた子ども達の声に押されてやりました。お芋をダンボール箱に入れ、幼稚園へ向かいました。園に到着すると、地面が濡れていきました。前夜、雨が降ったとのこと、「落ち葉が湿っていてよく燃えないから、今日は止めよう」と言うと、「大丈夫だよ、下の方は濡れていないよ。焼き芋やろうよ。下の方の落ち葉を運ぶから」と強く主張しました。私は少し考え「よし、やろう！ 焼き芋やろう！」と宣言しました。子ども達は「焼き芋だ！」と飛び上がって喜んでいました。

早速、準備にかかると、みんな行動が早い。小さな体いっぱいに落ち葉を抱えて、どんどん積み重なつて、子ども達の背より高い落ち葉の山ができました。事務所に行って「マッチ」をもらってきて、と頼むと「マッチって何？」と尋ねる。「し」をつけるやつだと言うと「しって何？」ときた。私は困って、そして気が付きました。今どきマッチなど無い事。私は江戸っ子なので「ひ」が言えないこと。先生が持ってきててくれたライターで「ひ」をつけました。モクモクと白い煙がいっぱいに立ち上がり、子ども達は大歓声。わざわざ煙の流れる方に入っていく子、近くの土管の穴の中に潜り込んで頬杖をつき、顔を真っ赤にして眺めている子もいます。焼き始めから1時間近くなると「まだー？」「まだー？」の連発。私が「まだまだ、給食の時間位になるから、遊んでおいで、焼けた頃に、呼んであげるから」と言うと、取り囲んでいた人数も少し少なくなりました。それでも顔を真っ赤にして待っている子もいました。遊びに行った子も、時々様子を見に来ます。表面だけ燃えた焚火を、ひっくり返し下の葉を燃やします。パッと燃え広がると、囲んでいた子ども達から再び歓声が上がります。しかし、私は熱いのです。汗びっしょりになり、もう止めようと思いました。

2時間が過ぎる頃に、やっと燃え尽き、小さな灰の山になりました。子ども達に「焼き芋、できたよー」と声を掛けると、集まってきました。お芋を包んでいた新聞紙を取ると、ホカホカの焼き芋の匂いが香ります。「焼き芋の匂いだ、いい匂い、早く食べたい」と言いました。クラスに戻って、小さな一片のお芋を口にすると、「うまい！」「美味しい！」の声が上りました。口々に「園長先生、ありがとう」と言ってくれました。私は倉庫に入り、汗でびっしょりになった体を拭きました。少し疲れ、また少し風邪を引きましたが、心の中はほっかほっかになりました。また、やりたくなりました。そして、次の週にまたやりました。その日は、前回体験している子ども達の中から、焚火奉行K君が現れました。火吹きを口にくわえ、手にうちわを持ち、片膝を立て、顔を真っ赤にして、焚火を仕切っていました。それが、格好良いのです。子ども達は自然に「K君これ焚火に入れていい？」などといちいちK君の許可を仰いでいました。私は、近くのタイヤに座って眺めているだけで、今度は楽でした。



卒園児の新年会

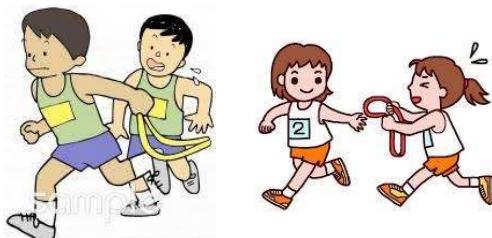
(2019.2.01)



お正月、新学期前に卒園児（小学1年生）の新年会がありました。例年ですとホールに集まって、みんなで挨拶をして園歌を歌って、先生方が用意した福笑いなどのゲームをして、いつものカレーの昼食をとり2時に終わる、といったパターンでした。しかし、この日はいつもの年に比べ暖かく、園庭も霜解けのドロンコ状態ではありませんでした。三々五々、子ども達が集まって、来た順にみんな仲の良い友達同士で遊び始め、後から来た子も各々の輪の中に加わり、とても楽しそうでした。あまりに夢中に遊んでいたので、声をかけるのにはばかられました。折角大きな「福笑い」や「大型カルタ」など準備したのに、担当の先生には申し訳ないのですが、このまま自由に遊ばせておこう、ということになりました。

しばらくすると、何人かの子が、幼稚園の時のようにリレーがやりたい、と申し出てきました。リレーをするためにコーナーに白線を引いていると、みんな集まって来て、とうとうクラス対抗の全員リレーになりました。人数が足りないクラスがあり、先生たちも人数合わせのために参加することになりました。高貴（後期ではない）高齢者の私も参加しました。「先生たちは走らないで早足で」などと言ってましたが、とんでもないことになりました。私達が真剣に走っても、子ども達と同じ速さでした。抜きつ抜かれつ、実力伯仲で、大いに盛り上りました。箱根駅伝よりずっと面白かったのです。終わると、もう一回もう一回と、言います。最下位のクラスが、次は一位になつたりして、私も何度も走らされました。二位以上になれなかつたクラスの中で、悔し泣きする子もいるくらい、熱中しました。私もかなり疲れたので、リレーは終わりにすると、すぐにまたみんな砂場やブランコ、縄跳び、鬼ごっこ、ドッヂボール、山林の探検等々に散らばって遊び始めました。休む間もなく、園長とK先生チーム対子ども達とのサッカー対決に引っ張り出されました。卒園して一年も経たないので、パス回し、ドリブルも上手で、私は何度もボールを奪われ、抜かれてしまいました。

疲れてベンチに座り、子ども達とおとし玉や家族のこと、そして学校のことが話題になりました。A小学校では、持久走の一位から上位のほとんどをふたばっ子が占めてしまったことや、各学校のリレーの選手もふたばっ子が多かったようでした。2時の解散時間になると、「もっと遊びたい、帰りたくない」「いいな！ふたばは」「幼稚園に戻りたいよ」と言いだしました。中には「ふたば小学校を作つてよ」という子も現れました。自由に伸び伸びと、実際に楽しそうに遊んでいる子ども達を眺めていると、ずっとこのまま平和で健康な世の中が続くことを、祈らずにはいられませんでした。そして「ふたば文化は、いつまでも子どもの楽園であり続けよう」と心に誓いました。



子どもを抱きしめよう！

(2019.3.01)



児童虐待が後をたたない。どうしてあんなに残虐なことが。やり場のない怒りに、胸が張り裂ける程苦しくなる。昔から日本の社会は、子は宝としてきた。江戸から明治にかけて来日した外国人が驚いたのは、子ども達がとても大切にされ、男も女も子どもを抱き、頬ずりをしてかわいがっていることだった。生活は質素で、実に貧しいが、子ども達は道路でもどこでも、喜々として楽しそうに遊んでいた。それを見ている大人は、みんな笑顔であった。

数十年前に、取手市で小学校低学年の男児が虐待死して以来、児童虐待防止協議会等に関わってきたが、児童虐待は爆発的に増加している。虐待死が明らかになると、マスコミも騒ぎ、児童相談所や教育機関が責められるが、原因は非常に複雑である。もともと家族という私的な領域に、行政権力が過度に介入すると、修復することができることも、できなくなる恐れがあり、非常に微妙なバランスを必要とする。また、対応する行政の職員は、少人数で急増した虐待件数をかかえ、疲れ切っている。

なぜ虐待が増えているのか？冷静に考え、原因を考えてみる必要がある。虐待が増加したその時代、その社会、その変化を考えると、原因は無数にあり複雑である。殆どの場合、父親が点々と職を変え、居を変え、自立できない母親が父親のDVに耐えながら付き従っている。取手の事件も、目黒の結愛ちゃんも、野田の心愛ちゃんの場合も同じである。

その底にあるのは、貧困であり、格差である。それが親の心を荒んだものにして、弱い者に攻撃の矛先を向ける。江戸から明治の日本社会は、質素で貧しかったが、貧困はなかった。今の時代、今の社会は、だれもが車を持ち、食べるのに困らず、とても豊かだが、貧困と格差が広がり、心が荒んでいる。格差をなくし、貧困がない社会と、そのための政治が求められる。富裕層には、無償化は不要である。競い合い、比べ合うことは止め、物質的な豊かさを追い求める時代は終わりにして、心の豊かさを求める時代に転換しなければならない。

殺された2人は「愛」という名が付いている。子を授かった時は、愛情に包まれていただろう。それが、苦しい生活の中で鬼になってしまったのか。親だけでもなく、行政に任せるだけでなく、社会全体が、子どもを守り育てることが大切だ。子は個人の子ではなく「社会の宝、国の宝」だったのが日本の社会であった。そうであるなら、他人の子でも、口を出し、手を貸し、みんなで育てる意識を持ち、一人の親の負担をなくすこと、それが虐待防止、しいては少子化対策にもつながる。最後に、公共広告機構が出した広告を載せます。じっくり読んで下さい。

子どもの頃に、抱きしめられた記憶は、ひとの心の奥のほうの、大切な場所にずっと残っていく。

そして、その記憶は、優しさや思いやりの大切さを教えてくれたり、ひとりぼっちじゃないんだつて、思わせてくれたりそこから先は行っちゃいけないよって止めてくれたり死んじゃいたいくらい切ないときに支えてくれたりする。

子どもをもっと抱きしめてあげて下さい。ちっちゃな心は、いつも手をのばしています。

本当の楽しさ（楽しさの中味）

(2019.4.27)



保護者の中には、本園の保育内容について、遊んではばかりで「勉強」の方は弱い、と言っている方がいるようです。幼児期の遊びは、生活そのものであり、人間としての基礎を培う学習そのものです。そこでは、友達との遊びを通して、人と関わる力や、様々な体験、活動の中で、創意工夫、考える力、創造力や想像力を育てます。お店屋さんゴッコ、郵便ゴッコなどで、言葉を豊かにして、文字や数への興味・関心を引き出し、自然に書いたり読んだりするようになります。小学校の学習の先取りをして、勉めて強いるようなことをして、学習への意欲を奪うようなことは、慎まなければなりません。

また、遊んではばかりで、実に楽しそうだけど、楽しいばかりで良いのだろうか、というご心配をする方がいますが、苦しいばかりで楽しくないよりずっと良いのです。実は、本当に楽しいことは、ただ楽しいばかりでなく、苦しく、つらいことがあるのです。本来、子ども達は、やりたがり屋、知りたがり屋で、苦しくても辛くても挑戦して、頑張るのが好きです。そして、何度も何度も挑戦して、成功した時の達成感「やったー！」「できたー！」という時の爽快な気分、「僕はできるんだ！」「私はやれる！」という意欲と自尊感情を心の内に蓄えていくことが、人として強くたくましく生きていく力になるのです。小学校以降の勉強や仕事をするに当たっても、この強い心が基礎になるのです。根性を振り回すのは嫌ですが、これが内面から湧き出る「本当の根性」だと思います。

「遊び」は自主的・主体的なものですから、決して、他から押しつけられたり、強制されたりするものではありません。手の皮が擦り剥けて血がにじんでも、何度も挑戦を繰り返し、パッと逆上がりができた時のあの誇らしげな顔。達成感・自尊感情を育てます。私達は「すごい！やった！」と共感するだけでいいのです。余計な口出しをしてはいけないです。子ども達の「遊び」は、自分自身の直接体験の中から、自らの喜びを見出すことです。友達のAちゃんが、先生に手紙を書いて渡したら、先生が喜んでいたその姿を見て、私も書きたいと思った時、一気に書けるようになります。お母さんが、ただ、字を習わせようと、躍起になって教えるよりも、面白くないことを体験させるだけで、あまり効果が多いように思います。

何もやる気がなく、ただフラフラしていることは、楽でしょうが、決して楽しいことではありません。楽しさの中味は、できないことができるようになること、知らないことを知ること、その過程はとても苦しいけど、やりたい、知りたい、という意欲と努力の先に本当の喜び、楽しさがあるのです。そして、人として、最も大切なものを心と体に蓄積するのです。勉強だって、仕事だって、楽しい、やりたい、と自ら向かっていった時に、最も効果があります。他人から強制されたり、指示された時は、効果は出ないです。大人の役割は、彼らがチャレンジしたくなる環境を整え、援助することだけです。

孔子も言っています。「知之者不如好之者、好之者不如樂之者」（これを知ってる者は、これを好むものにかなわない、これを好む者はこれを楽しむ者にかなわない）

本園の基本理念

(2019.6.01)



本園の基本理念に「たくましく、大地に根をはれ ふたばっ子」があります。先月は「楽しくなければ・・・」「楽園」のうち、楽しさの中味を述べました。今日は、「大地に根を張れ」の意味をお話しします。幼児教育は人格形成・人間の基礎・基本をしっかりと育てることです。いわば、「根っ子」の教育です。これは古今東西、幼児教育の専門家が誰でも言っていることです。昨今は、この人格形成の基礎を無視して、いわゆる早期教育、エセ英才教育など、見栄えのする枝、葉や花を咲かせることばかりを急ぐ傾向があります。根っ子がしっかりと大地に張らないと、バッタリと倒れてしまいます。基礎がしっかりとしないと、大きな建物は建てられません。大きな高層建築ほど、基礎が深く強固です。人間の基礎になるのは何か、「たくましい」心と体です。心も体もたくましくなければ、生きていけません。たくましくの中味は、しなやかで、へこたれない、強靭な心と体です。まずは健康で強く、調整力のあるしなやかな体が、人間の土台となります。子ども達は、遊びの中でこそ、大いに活動します。本園のこども達の活動量は、非常に多く、1年もすると、体力がつき、体のバランスも良く、走るのもとても速く、フォームもしっかりととります。調整力がつき、自分の体を自由にコントロールする力がつきます。給食もよく食べます。この健康でたくましい体に、いわゆる非認知能力がついて、人間の基礎ができてきて、小学校以降の学習や、将来の社会的活動の成功につながっていきます。（来月は非認知能力がいかに育つかについてお話しします）



三人の命の体験

(2019.7.01)



コンビニに入ろうとした時、目の前を燕がかすめた。見上げるとヒナが一斉に口を開けて、ピイピイと工サを求めていた。なんとなく頬が緩んだ。同じ日の午後、公園で三羽のスズメが地面をついばんでいた。おそらく二羽は親スズメで、一羽はまだ飛び始めたばかりの子スズメだった。久しぶりに見るスズメの親子をほほえましく眺めていた。すると突然、黒い物体が子スズメ目がけて突進した。大きなカラスだ。子スズメを獰猛にくわえ、飛び去って行った。親スズメは逃げようとせず、私と同様に驚愕して、ただただ立ち尽くしているだけだった。自然界の生命の厳しさを思い知らされ、いやな気分になった。

真偽の程は定かでないが、思い出したことがある。燕は猛禽類や猫に襲われないように人間の生活圏に近いところに巣を作るそうである。はたしてそうだろうか？昔は好奇心旺盛な悪ガキが沢山いて、何にでも興味・関心を持ち、知りたがる。取手の幼稚園の玄関先に、燕が巣を作り、ヒナを育て始めた。親鳥がせっせと工サを運んで、ヒナがピイピイ鳴き工サをねだっている姿は、とてもかわいらしく、多少玄関先を汚されても、菓子箱を下に置いて、見守っていた。しかし、ある日の夕方、三人の悪ガキが、先にクギの出た長い棒で、巣を落としてしまった。職員室にいた先生達に現行犯逮捕された。私が出先から戻ると、玄関先で三人は先生達に恐い刑事さんなんかよりよっぽど怖い形相で怒られていた。まるで極悪非道の凶悪犯のような扱いであった。

私は、涙目になり小さくなつた彼等を、玄関先に連れ出し、落とされたヒナを前にして、彼等の思いは分かっていたが「どうして、こんなことしたの？」と尋ねた。彼等は泣きだしそうになって、さっきより、もっと小さくなつて、肩を寄せ合つて下を向いていた。「巣の中を見たかったの？」と言うと、黙つてコクリとうなずいた。一羽のヒナが死んでいた。向うの電線に、親鳥が止まって、心配そうにこちらを見ていた。死んでしまつたヒナと、そのぬくもりを手のひらに持たせ、親鳥の様子を見せた。「毎日、せっせと工サを運んで、小さな命を守り育て、ヒナ達も一所懸命生きようとしてたんだよね」と言うと、三人の目から大きな涙が流れた。「よし、巣を作り直そう！」と声を掛け、そして発泡スチロールで箱を作り、その中に巣とヒナを戻し、ガムテープで頑丈に軒下に貼りつけた。勿論彼等も脚立を運んだりして働いた。巣を作つた後で、地球儀を持ってきて、燕は春になると、何千キロも遠くの東南アジアから渡ってきて、日本で子育てをして、秋にまた東南アジアに戻つて行く話をした。彼等は神妙に聞いて帰つて行つた。燕が巣に戻らないか心配したが、翌朝玄関の軒を見上げると、燕は戻つていた。彼等も学校に行く前に、心配そうに見に来た。燕には申し訳なかつたが、悪ガキ三人は、とても素晴らしい体験をした。

※ 6月号の続きは、次回に回します。



非認知的能力を育てる

(2019.9.02)



本園の教育理念は「たくましく 大地に根を張れ ふたばっ子」「こども達の楽園」という標語に現されています。根っ子の教育・・・心も体もたくましく、優しい立派な社会人になること、その基礎をしつかり育てることです。その為には、子ども達が主人公であり、自主的、主体的に楽しい園生活を送れるように配慮している事を前回述べました。

幼児期に重要な事は、特に非認知的能力を育てる事です。小学校以降の国語・算数などの評価可能な認知的能力に対し、評価の難しい非認知的能力は、目標に向かって頑張る力、他の人とうまく関わる力、自己抑制、感情をコントロールする力など、個人的、内面的な力です。

ノーベル経済学賞を受賞したヘックマンが「ペリープレスクール」の調査結果を発表し、世界的に注目されました。日本でも中教審で取り上げられ、幼児教育の重要性が認識されました。（しかし、政策的にはほとんど手を打つてないように感じられます・・・。何しろ、O E C D先進国の中で教育予算は最下位ですから）ヘックマンの主張は、①子どもの教育に国が予算をつぎ込むことが、経済効率が高いということです。②幼少期に非認知的能力を身に付けると、大人になってから、社会的地位、経済的安定につながるということです。

具体的調査の内容は、経済的余裕のない貧困世帯の3～4歳児123人の半数の子どもに週3回、1日3時間のプレスクールに2年間通わせ、さらに週1回教師による家庭訪問を行いました。そして、40才の時にプレスクールに通ったグループと通わなかつたグループを調査したところ、プレスクールに通ったグループは通わなかつたグループに比べて、収入が多い、持ち家率、学歴が高い、生活保護受給率が低い、犯罪歴が低い、という結果が出ました。この結果は、教育を受けてIQが伸びたからではないかと考えてしまいがちですが、子どものIQは、9歳頃から殆ど差はなくなっていました。（この調査は1960年から、まだ続いています。）

ヘックマンは、認知的能力を伸ばしたからではなく、非認知的能力を身につけたことが、その後の人生で大きな差が出たと考えました。①国の予算の使い方で、幼児教育の投資効率は明らかです。国民の社会的、経済的安定により、将来の税収が増え、犯罪発生数が減り、生活保護受給率が減るのですから、社会保障関係等の支出が減ります。②そして、学歴も社会的、経済的地位も高まるので、一人一人が人生をしつかり楽しめるようになります。

では、非認知的能力は、どうやれば高められるのか。私達はできたか否か、知っているか否か、目に見える認知的能力に目を奪われがちですが、失敗しても、諦めずに挑戦する意欲、苦しいことにも、我慢できること、自己抑制、感情をコントロールする力、人と関わる力（共感力・協調性）などの非認知的能力を幼児期に育てる事が大事です。そして、それは「遊び」の中でこそ育つのです。双葉はこのことを実践しています。もっと掘り下げ、具体例を上げて、次にお話しします。



AIに敗けない教育

(2019.10.01)



大学の仲間の集まりで、日曜の秋葉原行きのTXに乗った。車内は、昼間のため比較的空いていて、ゆったりと座れた。しばらくして気づいた。私の前の席の人々は、ほとんどの人がスマホの画面に釘付けになっていた。私も利用するが、本当に便利である。何でも検索できるし、どこに行こうが困らない。私の隣の若者も、友人と二人、会話もせず、ゲームに夢中になっていた。

歴史の鉄則の一つに「贅沢品は必需品となり、新たな義務を生じさせる」というものがあるが、洗濯機、エアコン、コンピューター、そしてスマホ。今ではなくてはならない物になっている。そして、それなしでは生活できなくなるほど、拘束されている。SNSが飛び交い、軽く通信が届く、軽く返信する。つい10年？20年？前は、重要な連絡は人を傷つけないように注意して、こちらの真意が伝わるようにじっくり考え、推稿して手紙を書いていたので、せいぜい、週に一通か、月に一通書くかどうか、という程度で済んでいた。だから、手紙が来ると、何かうれしくなり、心がホッとした。それで十分だった。

それがどうだろう。世界の大統領だって、ウソ、デタラメを連発して発信している。ウソも100回言つていると、真実になるというが・・・、文明は、人間にとって、毒にも薬にもなる。便利、効率ばかりを追い求めて、とんでもない迷路にはまってしまうことにならぬように、人間って何だ？人間の幸福って何だ？と問い直す必要がある。

米のシリコンバレーのコンピューター技術者の多くが、子どもを自然の中で、子ども同士が関わり合って生活する環境を守って育てていると言っている。プログラミング教室を進めていた開発者が、読解力のない子に、プログラミング教育をしても、全く意味を持たない、それより、絵本の読み聞かせ、読書をしっかりさせて、読解力を付けることが先だ、と言っている。幼児教育の基本は、心の教育である。他人と関わる力、考える力、忍耐力、想像力、非認知的能力、みんなAI、ICTにはない能力、できない能力である。人間にしかできない能力をつけることこそ、幼児教育の基本である。そのうえでICTを使いこなし、AIを操作することができるよう育てることだ。



ご支援、ご協力ありがとうございました。

(2019.11.01)



台風19号が各地に大きな爪痕を残しました。絹ふたば文化幼稚園は鬼怒川の越水により、大きな被害をこうむりました。5年前の鬼怒川の浸水により、想定される水位よりも、かなり高い防水壁を園独自に造り、設計事務所でも浸水対策は完璧とされていたので、まさかの事態でした。国交省の堤防工事が、どういうわけか、園のところだけ空いたままだったので、流れに勢いがついて、横から流入してしまいました。1階部分は灌水して、泥水がたい積し、ほとんどの物が壊れ、電気、水道は復旧するのに長時間かかる状態でした。しかし、保護者・土木・建築業者・絹の職員は勿論、学園の他園の職員、その他、たくさんのボランティアの皆さんのがけつけ、早朝から夜まで泥まみれになって、泥の除去・片づけ・清掃・消毒に奮闘し、疲労困憊でした。まさに「ふたばワン・チーム」の温かさを感じました。災害の大変さを本当に実感しましたが、このご支援を思うと、嘆いてばかりはいられません。「何のこれしき！」敗けません。特に休日を返上し、6日間連続で朝から夜遅くまで助けてくれた方もいました。心から感謝しています。もっと、もっと良い園にして、この恩に報いるように努めます。

そして、二つのことを考えました。人間は、他の動物と同じように、自然の中で生かされていること。人間は、今を生きるだけでなく、過去・現在・未来につながって生かされていること。どんなに科学や、技術が発達しても、この自然と時間は制御することはできないのです。人間にはどうにもならないのです。

防水工事、防潮工事などのハード面の対策は必要であろうが、人間が生きていくためには何が必要なのか、根本的なことを考えないと本当の対策にならないのではないかと思います。科学技術の発達で自然環境を破壊すれば、それは、そのまま人間に返ってきて、人間が生きる環境を失うことになります。地球温暖化による環境破壊は人間の生存を危うくします。たび重なる台風の発生も、異常気象も、温暖化により、海水温度の上昇が原因であることは明らかです。温暖化がすすめば、台風は発生しやすくなり、巨大化します。温暖化を止めずに、自然に対抗するように、巨大なコンクリートを築いても、さらに巨大化する豪雨・台風を防ぐことはできません。

人間は、今を生きるだけでなく、数万年もの人類の歴史を経て、何億もの遺伝子から選ばれ、生を受け、そして、未来へつながって、今を生かされているのです。現代社会は、祖先・家族が分断され、この時間の感覚を人々から失わせています。先祖がなければ今の自分はない。その遺伝子を未来につなぐため生かされているのです。そして、人間は、血を流し、命がけで「自由」を獲得してきましたが、そのことも未来に伝えていかなければなりません。先祖が獲得した自由です。自由、気ままに生きればいいわけではありません。今さえよければ、自分が死んだ後はどうでもいいわけではありません。こんなに環境破壊して、こんなに巨大債務を残して、今がよければいいわけがありません。子ども達は、とんでもない世界に生きることになります。将来、スウェーデンの環境活動家の少女ばかりか、子ども達からも、「あなた達を許しません！」と、トランプが睨まれられたような目で言われないように・・・



早教育

(2019.12.02)



9月にペリープレスクールについて述べましたが、ペリープレスクールのことは、2009年6月と7月にも園便りに書いてあります。ホームページの「理事長の話」を合わせて読んで下さい。

私達は文字が読める、100まで数えられる、計算ができる、ブロックを組み合わせられる、逆上がりができる、走るのが早いなど、できるかできないか、知っているかどうかなど、認知できる能力ばかり重視しがちですが、認知的能力も必要ですが、人生における成功や安定に関わる重要な能力は、自己抑制、忍耐力、意欲、人と関わる力などの非認知的能力です。そういうれば、企業の採用基準では、採用したい人は、認知能力ではなく、こうした非認知的能力がある人でした。

非認知能力について述べる前に、知育・早教育について述べたいと思います。本当の子どものことが分からないと、知育・早期教育に飛びつき、脳科学に走りがちです。私も昔、話題となった大脳生理学者時実博士の本を読みあさりました。また、一時期、ソニーの創設者井深さんが、大脳生理学の研究結果を元にした「幼稚園では遅すぎる」「0歳からの教育」を出版し、幼児教育の世界に旋風を巻き起こしました。講演は何度も聞きました。直接お会いして、お話をこともあります。しかし、何か引っかかるものがありました。子どもは脳だけでなく、体も心もあります。そして、計り知れない発達の可能性と、細分化できない能力と、まるごとの人格（体）を持っています。そんなに焦って訓練し、教え込むことで楽しい幼児期を奪って良いものかと思いました。

井深さんの早期教育にめり込むきっかけになった、バイオリンの早教育、鈴木メソードの鈴木先生のところにも行きました。5歳児がメンデルスゾーンのコンチェルトを完璧に弾くのに私も驚きました。そのうちの何万分の一の成功例を挙げて、誰もが天才になれるような話が出てきます。一人の成功の陰に、失敗してうちひしがれた親子を幾人も見てきました。

教育は一人ひとりの子どもが、立派に社会人になり、自己發揮して、豊かで楽しい人生を送れるように支援することです。その時代、時代を充実して生きることです。幼児期には、幼児期にふさわしい生活（＝遊び）を送ることです。井深さんは、晩年になって「教育は早ければ良いという訳ではない、まずはゆったり、温かい心と健康な体づくりが大切だ」というようになりました。私が脳科学に走らなかったのは、眞の子どもの姿、子どもの発達、子どもはそれはそれで完成した1つの人格であることを、子どもと生活する中で、体で感じ、子どもが大好きだったからだと思います。

